

セピア色の写真に偲ぶ富山の原風景

昔とみやま写真館

(第 2 版)

平成27年度
岡山市区づくり推進事業
(地域活動部門)協賛事業

資 料 協 力
旧富山村ゆかりの住民

企画・編集・制作
富山学区連合電子
町内会運営委員会

ご あ い さ つ

私たちの住む富山学区は、明治22年から昭和27年に岡山市に編入されるまでは岡山県上道郡富山村と言ひ、操山山系の南麓に東西に広がる、農家主体の300世帯足らずの閑静な農村地帯でした。

いまや都市化が進み、湊地区の一部も富山学区となり、世帯数も5千世帯になんなんとし、今の学区内の風景からは往時の面影はほとんど見られなくなりつつあります。

あまつさえ、旧富山村時代の村誌（史）的資料もなく、やがて時代は進んで行く中で「古きよき時代」を知る^{よすが}縁は、人の終息と入れ代わりに遂になくなってしまふのかと、一抹の淋しさを覚える日々でした。

そんな折りもあり、「私は、他地区から終^{つい}の棲家をこの地に求めて越してきたが、この地の来し方が知りたい。書物の活字だけではイメージできない」との声を聴き及ぶにいたり、また、とき^{あたか}恰も岡山市提唱の「区づくり推進事業」にも呼応し、旧来の住民から昔の写真や生活用具などを借り受けて写真集を作りこれに若干の解説をつけ、一方、富山学区のホームページに「昔とみやま写真館」として収録し、広く学区民に情報提供することとしました。

また、ご協力いただいた写真は紙ベースによるパネル展の場でも、広く学区民に見ていただきたいと思います。

どうか学区民の皆様にとって、この昔とみやま写真館が学区の来し方を知り、共に行く末を想う絆ともなつて、この地をこよなく愛する^{えにし}縁ともなれば幸甚です。

ここに、資料提供にご協力頂いた多くの皆様方に深甚の謝意を表し、「昔とみやま写真館」Web公開に際してのご挨拶といたします。

平成28年 1月 1日

岡山市富山学区連合電子町内会

運営委員会委員長 小野田 利 正

岡山県上道郡富山村 歴代村長の肖像



初代 山田 嘉平太



第2代 内田 忠次郎



第3代 笠井 吉夫



第4代 内田 縫次郎



第5代 笠井 幹夫



第6代 小野田 千代次



第7代 湯浅 喜三九



第8代 薄 勇喜太



第9代 大山 豊男



第10代 北根 朝章



第11代 内田 修二



第12代 深谷 寿男

百間川の樋小屋と水防警鐘台

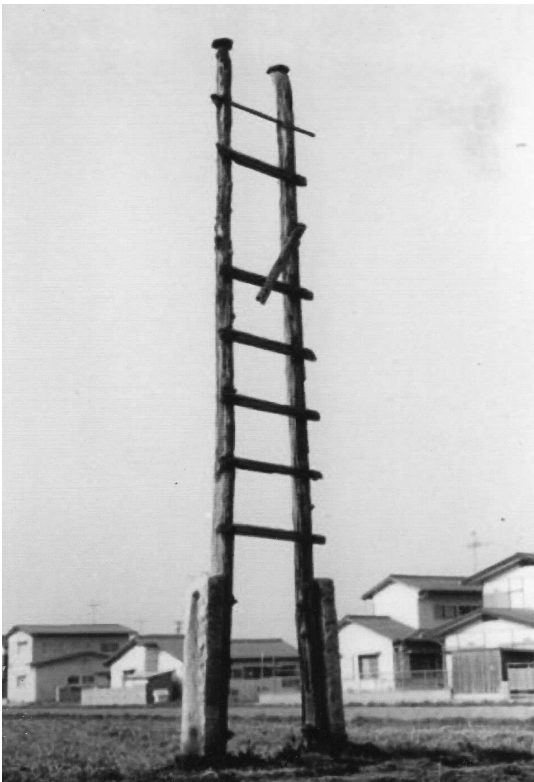
昭和47年ごろ



← 海吉地内の百間川堤防上から北方向を写したもの。

前方に樋小屋（ひごや＝樋板の収納庫）が写っている。

当時はもちろん海吉橋はなく、樋小屋のすぐ向こうは堤防が切れて県道の切り通しになっており、右手には田んぼの中の道を益野方向へ向かう自動車が写っている。



写真協力 小野田利正氏



↑ 上のモノクロ写真と同じ場所で撮った近影。正木山の姿は不変だが、昭和60年に海吉橋ができて風景は一変している。

↑ 今はなき水防警鐘台（昭和40年代中ごろ撮影）

百間川に洪水の危機が迫るとこの半鐘（戦後のどさくさで行方不明になった）が乱打され、村人たちは切り通しに樋板をはめ込み、あるいはカマス土嚢で樋板を補強し、村を水害から守ったものだ。

切り通し部が閉鎖されている間はもちろん県道は通行止めとなり、住民はずいぶんと不便を託ったものだ。



わらぐろの思い出

昭和36年ごろ



写真協力：久保裕子様

ごぎょう田＝レンゲ畑で遊ぶ子どもたち。遠方には、今では見られなくなったわらぐろが郷愁を誘う。



百間川堤防まで百数十メートルの海吉出村地内で撮った昭和三十年代半ばごろの写真である。
撮影地点に立って比較写真を撮ろうとしたが、住宅の壁に遮られて果たせなかった。例え屋根によって撮影したとしても、写るのはびっしり並んだ家並の無機質な風景だったであろう。

出村大師堂落成～ご本尊安置稚児行列

昭和33年秋



現在は、ここ（用水の上）には
自転車置き場がある。

現在はスリーバンド化成株用地

行列の向こうには、当時の「丸ハンドルのオート三輪」トラックの姿がみえる。



- ・ 昭和32年ごろ、旧大師堂を取り壊して現在の大師堂を新築するに際し、不動尊と弘法大師座像を一時北根邸（1423）へ移設安置した。
- ・ この写真は、落成した新しい大師堂へ不動尊と弘法大師像を納めるときの稚児行列風景で、北根邸を出発した行列が、県道から農道（バス停南の南北道路）にさしかかったところである。
- ・ 行列は、このあと大谷邸前から岡村商店（現 モンマートみやけ）の十字路経由で、丸端の新大師堂へと進んだ。

セピア色の思い出

昭和33年ごろ



昭和33年ごろの写真 小野勝己氏提供

文字通りセピア色の小さな写真には、ホテルやナマズが棲んでいそうな野趣あふれる小川も写っていて、田んぼのはるか向こうには操山（百崎墓地？）が霞んでいる。

左下の小川は現在の海吉サニー団地北辺に東西に横たわる用水で、今では三方コンクリートに改修されていて小鮒一匹見かけたことがない。

現在の海吉出村地区は住宅が密集していて、同じアングルで写真を撮ろうにも画面いっぱいワットと家並みが迫ってきて、とても比較写真になどなりようがない変わりようだ。

二人の少年が写っているが、虫かごらしいものを手にしている手前の坊やが8才当時の小野勝己氏（写真提供者）だそうだが、もう一人は定かでない。

筆者が小学生の頃は夏の夜に「キモ試し」というのがあって、夜の真っ暗なこの道、そう！まさにこの畦道を、一人で百間川の土手まで往復した（実は上級生に往復させられ

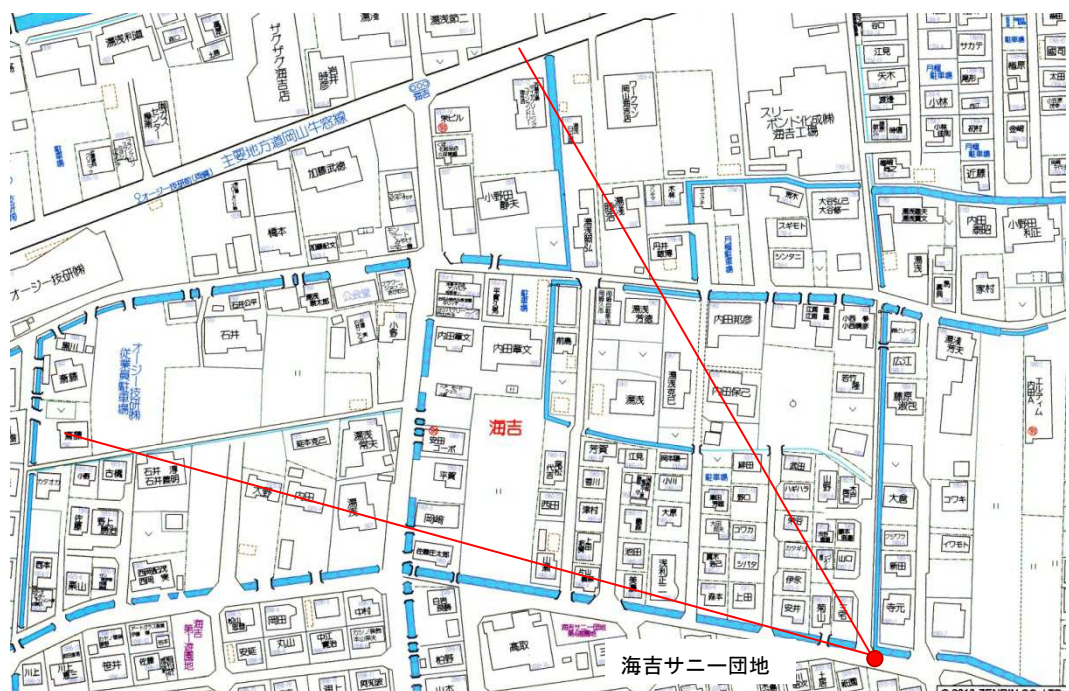
た）ものだが、途中の茂みには上級生が潜んでいて、「わっ！」と脅かされたときの怖さといったら例えようがなく、まさにキモがキュンと冷えたのもいまでは懐かしい思い出だ。

コンクリートで塗り固められた小川、アスファルト舗装の道・・・、瀟洒な住宅の立ち並ぶ現代にこの写真をオーバーラップさせながら、トンボもドジョウもいなくなった”ふるさと”にふと慨嘆を覚える回想のスポットではある。

しょうしゃ

（文：小野田 利正）

写真の背景から察するに、現在の海吉サニー団地の北辺から北西方向を撮影したもののように、まさに今昔の感一入である。



古の船頭道



運河としても利用された倉安川は高瀬舟が往来し、自由に竿が使えない橋の下では、船頭がもやい綱をもってこの石垣道を船を引いて歩いたのだという。

倉安川では、唯一ここだけに残る船頭道だった。

「海吉」信号の北方70mの「まるはなばし」の下の船頭道

この写真（2つとも同じ船頭道を撮ったもの）は往時のものそのままだが、平成16年の丸端橋改修時に撤去され、今では橋桁の両側に船頭道を模した石組みが構築されている。 ↓



写真協力：小野田 利正氏

消えたかわいち



↑ 海吉出村地区の倉安川にあったかわいち。平成12年ごろ撮影

「かわいち」・・・、ご当地風に訛って言えば「かうえーち」となるうか。

権威ある辞書にもインターネットにも載っていないが、農作業で汚れた農具や手足を洗ったり、畑の水遣りに使ったり・・・、上水道のない時代には、庶民にとって井戸水と並んで生活に欠かせない利水場であった。



← お正月にはお飾りが……。かわいちに寄せる庶民の思いが偲ばれる。

倉安川が百間川で分断されるまでは、用水期でなくともある程度の水量があったように思う。

特に、田園地帯に点在する用水沿いの民家には軒並みに所帯場（炊事場）に接続したかわいちがあって、楚々として流れる川水で野菜や食器の下洗いをし、中には風呂水もここから汲む家もあったようで、先人たちの生活の息吹が伝わってくるようだ。



↑ 用水に接続した炊事用のかわいち

「かうえ〜ち」、老人にとってはなんとも懐かしい響きのこの用語も生活施設も遠からず死語となるであろうし、現に目にすることもなくなってしまった。

上水道が完備し、下水道の整備が最終段階を迎えた現在、利水や生活の様式もずいぶんと変革を遂げたが、せめて遺された「かわいち」の残像に先人たちの生活の営みを偲びたいものだ。

寄稿：小野田利正

写真協力：福森和子

倉安川の護岸改修と栴檀の木

せんたん

平成15年ごろ



海吉出村（長田）地区の倉安川は、平成15年の護岸改修工事によって法面に生えていたイチジクや栴檀の木が撤去され、自然石による護岸に生まれ変わり様相は一変した。

↓

↑ 総延長20Kmに及ぶ倉安川の流域で、唯一“栴檀”の木が生い茂っていたのは海吉出村の長田（ながだ）地区だった。

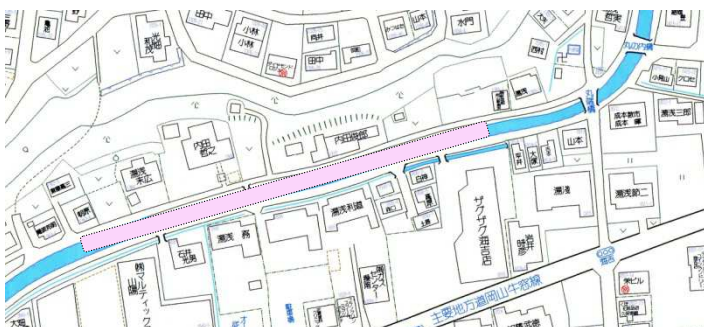
↓ また、この地区には4箇所ばかり“かわいち”が残っていたが、用水期以外は水流がなく、溜まり水は腐臭を放っていた。



↑ 開発か保存か・・・、議論は分かれるところであったが、護岸と河床整備工事によって増水時の排水能力が飛躍的に向上したことはたしかだ。

↓

〔その後、南岸にはガードパイプが施工された。〕



写真協力：海吉出村電子町内会

景観一新、長田のドブ川

平成17年 ⇒ 同27年



↑ 平成17年ごろ撮影

「長田（ながた）」はこの辺りの小字名で、写真の現地は富山橋から倉安川南岸沿いに北東方向に数十メートル入った付近である。
この水路の右手一帯が田んぼだったころは用水の体をなしていたが、宅地化が進み生活雑排水の捨て場となつてからは文字通りの「ドブ川」となり、水が淀み悪臭を放っていた。 ←

平成20年度に第1期工事として用水路部分が整備された。



写真協力：いずれも小野田利正氏

→ 平成二十五〜二十六年度に最終仕上げの改修工事が行われ、用水には管理道が設けられ、擁壁も整備されて道路と倉安川の南岸堤防道路も広くなり、最大幅員は四、九メートルにもなるなど、様相と景観は一変した。



↑ 平成27年2月撮影

富 山 橋 今 昔

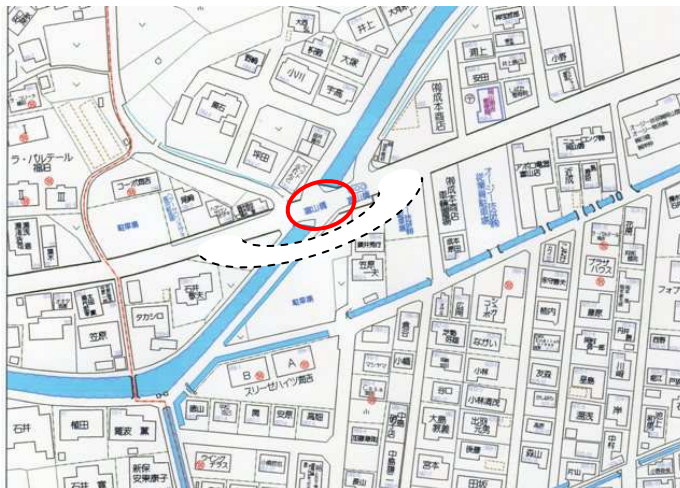
改修前 ⇒ 平成 1 7 年



← 主要地方道「岡山～牛窓線」の海吉地内で倉安川に架かる橋である。

昭和初期の築造と思われるが、なにせ橋体から水面までの距離がご覧のとおり少なく、増水時には水流を堰き止めるようなことになってしまう。

護岸を整備し、排水機所のポンプ能力をアップしても、これではどうにもならない。



← ↑ 迂回路設定のため、富山橋東詰南のMさん宅は取り壊しとなり、竣工後復元された。



← ボックスカルバート工法の新しい富山橋は、2年がかりで平成17年に完成した。

川底から橋体底面までは2.8メートルあり、これで増水時でも流断面面積は確保されることとなった。

写真協力：小野田 利正氏

空 撮 2 題

昭和40年頃



↑ 百間川下流上空から、海吉（福吉～出村）～福泊方面を望む。現在の住宅地も百間川河川敷も、一面の田んぼだ。
（写真協力：佐藤泰彦氏）



↑ 敷地造成工事中の新富山小学校。一部新校舎を使用開始し、運動会が行われた。
（写真協力：佐藤泰彦氏）

人力搬送式消防ポンプ①

(大正15年製)



消防ポンプ新調記念写真

法被の襟に
富山消防組
第五部長
などの文字がみえる。

写真協力：佐藤泰彦氏 ↑



海吉福吉の古民家の納屋に眠っていたエンジン式消防ポンプである。出動の際には、前部の木製の把手を伸ばして人力で搬送する。

工具箱に「大正十五年五月新調」「富山村福吉消防組」と書かれている。

当時は、各村落（本村、中村、出村、福吉、福泊、山崎、円山、嶽）ごとに消防組があってそれぞれに消防ポンプ車を装備しており、村内で火事が起きればどこまでも（相互支援で）出動したという。

写真協力：海吉福吉町内会

人力搬送式消防ポンプ②

(昭和13年新調)



エンブレムにはローマ字で
TATUMAKIの文字が。



(右から左へ) 富山消防組
第八部と大書してある。



エンジンカバーに
「昭和拾参年三月新調」とある。



ポンプ本体は主輪と操舵輪がある四輪車で、把手をもって
引っ張って搬送する仕掛け。エンジンは米国フォード製だ。
ホースの延伸・巻取り用は二輪車で、いずれも轍（鉄製の
輪っば）を嵌めた車輪となっている。



ホース格納用には別に二輪車があり、
これにはホースの延伸・巻取り装置も付
いている。筐体には「本村」の表示あり。

古老によれば、富山村内の部落単位（本村、
中村、出村、福吉、福泊、山崎、円山、嶽、湊）
ごとに自衛消防組があり、それぞれに消防団が
いて消防ポンプも装備していたという。

時は移ろい、消火栓等の消防水利や行政の消
防力が整備されるに伴い、これらの自衛消防ポ
ンプは姿を消してしまった。

現在、現物が遺っているのは、海吉福吉の大
正15年製と、この海吉本村の2台だけとなっ
たが、先人たちの「安全・安心」にかけた思い
を偲ぶ縁（よすが）としたいものだ。

写真等協力：海吉本村町内会

昭和30年代の富山幼稚園



福泊のJA富山支所の裏に富山コミュニティハウスの裏の小高い所にあった富山幼稚園舎。昭和三十三年から同四十一年までであったようで、それぞれの年の卒園写真が残っている。

昭和三十年代の初めごろ、旧市内の某小学校を解体した部材の一部を活用して建てられたが、幼稚園が現在の場所（小学校の西隣り）に移ってからは老朽化が進み、平成二十年に岡山市により解体し撤去された。

↑ 写真提供：小野田利正氏

幼稚園舎建設前の敷地造成奉仕作業

山裾を切り崩し、園舎建設用地を造成したのは町内会単位での学区民総出の手作業であった。下の写真は、円山部落民による奉仕作業の様子である。（写真協力：[湊]岡村正義氏）



忠魂碑建立

昭和40年ごろ



(写真協力 太田 操氏)

遺族会が中心になり、現在のＪＡ富山支所前の三叉路脇に建立され、入魂と慰霊の祭祀が神式で執り行われた。



写真協力：富山学区連合電子町内会

銘版には、第２次世界大戦で戦死した富山学区の戦没者６６柱の氏名が刻まれている。

エンディングセレモニー 2 景

昭和 3 2 年（最後の土葬）



写真協力：石井 博 氏

↑ 土葬としては最後の葬送風景。翌昭和 3 3 年からは火葬になった。

昭和 4 0 年（自宅葬）

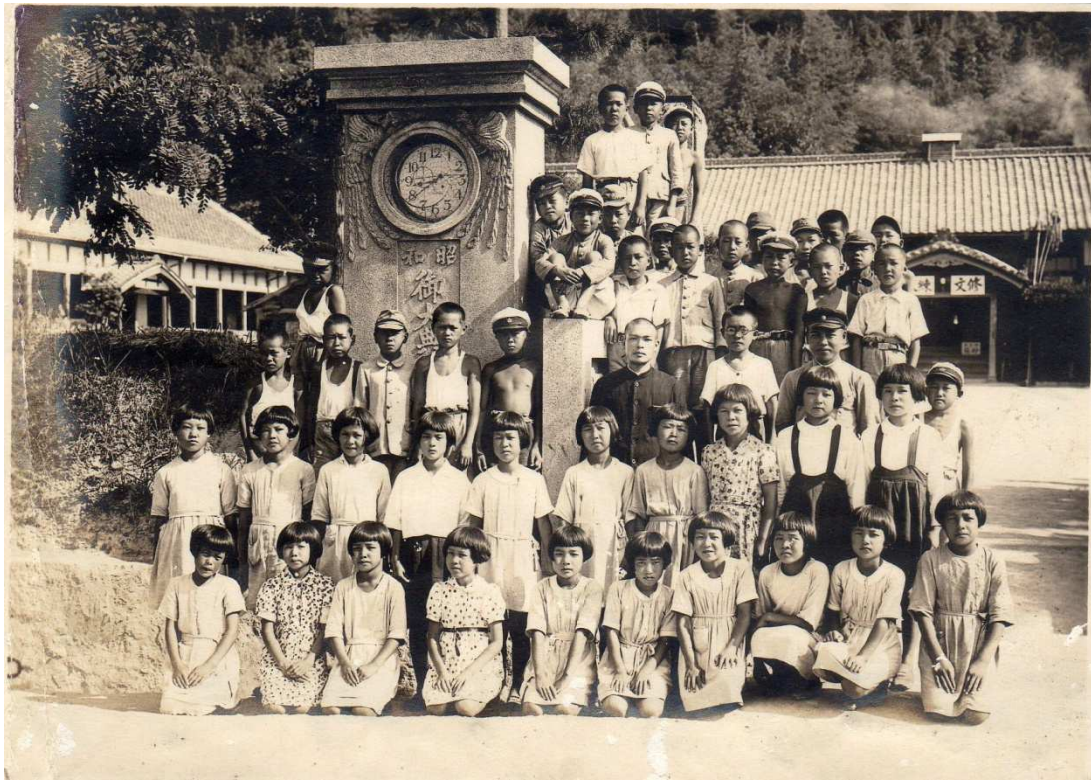


写真協力：薄 一衛 氏

↑ 家で行う葬儀のご当家風景。今ではあまり見られなくなった。

回顧「富山小学校」①

昭和18～19年



写真協力：石井 博 氏 ↑

昭和十八年ごろの富山小学校校門の「昭和御大典記念」時計台。校舎の屋根の上には「空襲警報」を知らせるサイレンが見える。



男子は戦闘帽に草履、女子はモンペ姿

旧國民學校玄関前で昭和十九年度の卒業写真。「文Ⅱ学問を修め、武Ⅱ武術を練磨すべし」の訓えが戦時下を物語っている。

写真：「富山小学校創立百周年記念誌」より転載 ↑

回顧「富山小学校」②

昭和32年



写真提供：石井治夫氏

昭和36年ごろの富山小学校平面図

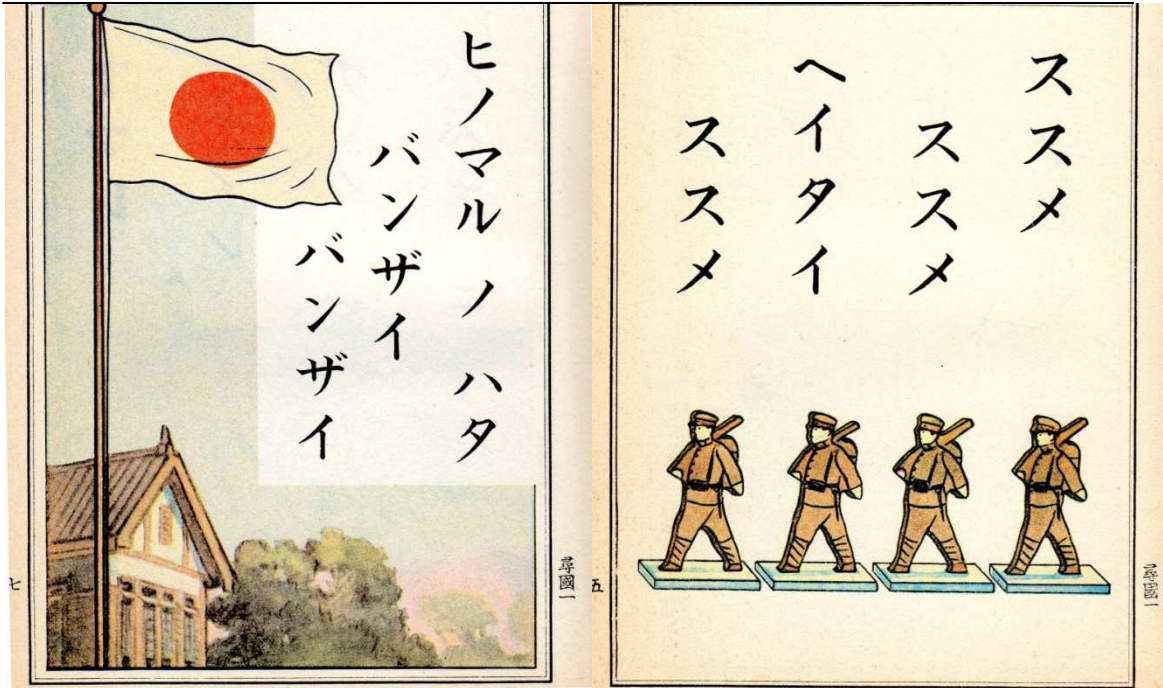


戦時中の小学校や子どもの様子

昭和18～20年当時

小學國語讀本

卷一



戦時下の小学校生活

小野田利正

戦争が激しくなる頃、軍国主義の訓えは小学校（名称も「国民学校」）も例外ではなく、校門が近くなると（今でいう）通学班の上級生は「歩調をとれ！」と号令をかけ、児童らは一斉に手を振り足並みを揃えて校門をくぐったものだ。

校門を入った左手には歩哨の哨舎があり、高等科のお兄さんが模擬銃を持って立哨していた。

校舎玄関の両脇には「修文」「練武」（学問を修め、武術を練磨）と大書した看板が掲げられ、校庭の隅には直径十余メートル、深さ2～3メートルのすり鉢状の穴が掘られ、その斜面を体を倒して全速力でぐるぐる走れば、戦闘機に乗っても目が回らない・・・、なんとそんな訓練を小学校の上級生は大まじめで行っていた。

校庭の東半分は固い土を掘り起こし、食糧増産の掛け声のもとサツマイモがびっしり植えられてもいた。

物資は不足し、「どこのお店を回っても、アルミの弁当箱がなかった」という母の話を思い出す。

筆者は小学3年生の夏が終戦で、ゴム靴などは減多に手に入らず、2～3年生の頃には自分で編んだわら草履を履き、綿入れの防空頭巾を携えて通学していた。

学校の廊下や街角に貼られたポスターには、

・ 撃ちてしまえ！（敵を撃破するまでは、攻撃をやめないぞ！）

・ 進め一億 火の玉だ！

・ 欲しがりません 勝つまでは！

などの戦意を鼓舞する標語が貼られ、いまだに忘れることができない。

そんな小学生生活を、今の子どもたちにさせてはならないと、本当に思う。

鳥 瞰 の 移 り 変 わ り

お滝山からみた福泊平野

昭和 4 5 年



昭和 5 1 年



出水により道路冠水した福泊
公会堂付近 →



写真協力：(いずれも) 古家富継 氏



平成 現 代



福泊にあった富山郵便局

昭和 7 年

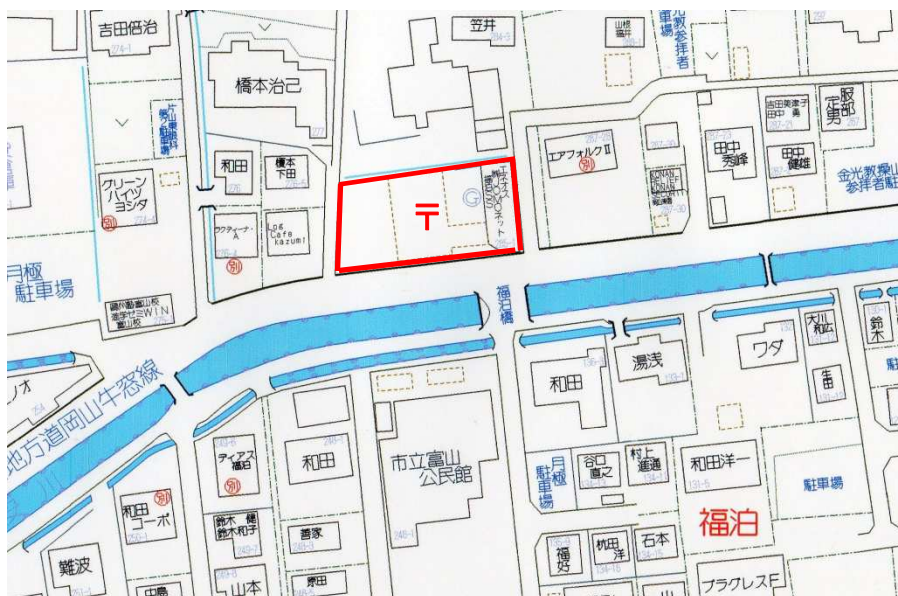


昭和 7 年ごろ撮影

富山公民館北（現在のガソリンスタンドのあるところ）にあった上道郡富山郵便局の昭和 7 年ごろの写真である。

椅子に腰かけているのが当時の小野田正孝郵便局長（昭和 6 年 2 月～同 23 年 2 月）で、その右後方は（向かって左から）局長夫人と岡村菊子局員、左手の青年は電報配達人だ。

道路はもちろん舗装などされてなく、たまに自動車が通ったりすると砂埃が局舎に舞い込むので、就業前の局員の仕事は倉安川の水を柄杓で汲んで道路に撒くことだった。



時は移ろい、福泊の郵便局は閉鎖され、富山学区の人口の飛躍的増加に伴い、郵便局は円山（昭和 44 年）と海吉（昭和 53 年）に開設されることとなり、現在に至っている。

写真は、小野田局長の子息：小野田利正氏の提供による。

富山公民館界限

倉安川の草刈り

平成12年



公民館北のガソリンスタンド前から金光教会の南にかけての倉安川には、びっしり雑草が生い茂り、福泊の農家の人たちは総出で草刈りをしたものだ。
その後、護岸と河床が整備され、こんな光景は見られなくなった。

写真協力：石井 博 氏

富山公民館敷地造成開始

昭和62年11月



富山郵便局跡にはガソリンスタンドができ、手前の田んぼには富山公民館が建った。平成の現代、富山公民館の駐車場に立って山手を見やるとき、誰がこんな風景を想起できるだろう。

写真協力：古家富継 氏

富山歩道橋の渡り初め行事

昭和42年4月10日



岡崎岡山市長と近藤校長によるテープカットの後、親子三代の苔ロー家や代表者が渡り初めをして竣工を祝った。

(写真協力：いずれも苔口 修 氏)



曹源寺の松並木

昭和36年



昭和36年 閑栖さん入寺歓迎の様子

昭和36年、曹源寺に隣接する日蓮宗「大光院」の倉庫を片づけていて発見された写真。

曹源寺大門から南に向けて撮られた写真の松並木の両脇には一軒の住家もなく、現今の円山境内町内会の佇まいを思うとき、まこと今昔の感一入である。

「閑栖さん入寺歓迎の様子」と注記があるが、「閑栖さん」と大光院の関係や“入寺”のご用向きなどは不明である。

写真提供 : 円山中央町内会 横田廣太郎氏

富山ニコニコ会

昭和35, 37年



上の写真は「昭和37年5月17日、曹源寺での春季総会」時のもので、当時の富山ニコニコ会の山田楠野会長のアルバムには「近藤鶴代先生出席さる」との書き込みがある。

下の写真には「富山ニコニコ会 県市表彰伝達式並びに総会 昭和35年4月15日」とあり、池田厚子さんが出席されていて、この写真にも写っている。

「富山ニコニコ会」は昭和34年3月に結成、さして人口の多くなかった当時に学区の高齢者親睦団体として存在し活動していたが、その後学区の人口（当然、高齢者）も飛躍的に増え、老人会活動は各单位町内会での活動へ移行、「富山ニコニコ会」は平成2年に至り発展的解散を遂げた。



乗 合 バ ス

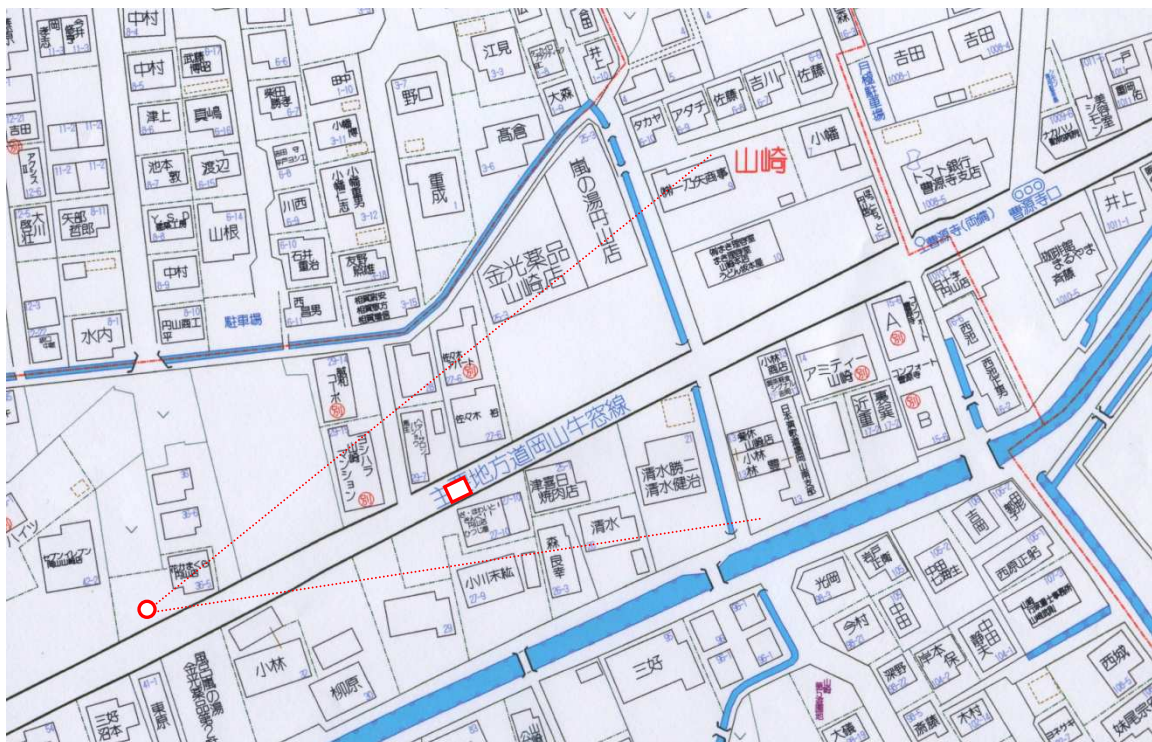
昭和初年ごろ

現在の県道28号（岡山〜牛窓線）の岡山市中区山崎地内（ヨシハラマンション付近）を、砂埃を巻き上げて西進する木炭バス。道路は砂利道で、古老の回顧によればバスと言っても座席は5〜6席だったという。（後方の遠望は芥子山）



← 旧道の東山峠を走る「岡山行」の乗合バス。数年後には多少大型化した、依然木炭ガスで走っていた。

写真は、いずれも山陽新聞社発行の写真集「岡山県民の昭和史」（昭和61年6月刊）から転載



← 山崎地内を西進するバスの撮影場所想像図

円山消防組の消防自動車

昭和 6 年頃



富山村消防団では、円山消防組だけが消防自動車を装備していた。これは、関場邸前での記念撮影である。消防車庫は、山瀬川の上（現在、ごみステーションがある辺り）にあった。

裏書に「自動車唧筒購入記念」とある。
ショクトウ

写真協力：山田妙子 氏

そのポンプ車による消防演習の写真である。場所は海吉中村と出村の境付近で、静観荘の東端斜面に向けて放水している。手前の水は倉安川である。



写真協力：三宅一憲 氏

円山城主一族の墓所

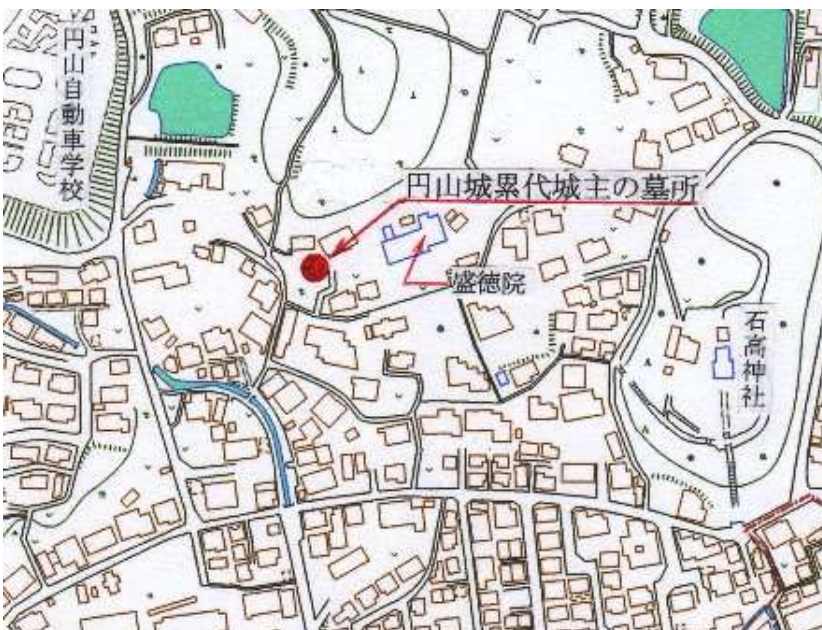


← 豊島（てしま）石製の家型の墓石が、6坪ぐらいの墓所にずらりと並んでいます。

伝承や郷土誌によれば所縁の人物として「松田氏の部下寺井十左衛門、あるいは宇喜多の臣寺尾作左衛門」などの名があげられ、墓石の規模からも城主の権威を象徴して余りあるものがあります。

↓ 円山城の累代城主の墓所は、石高神社と円山自動車学校の間付近の丘陵地にある「盛徳院」の西方にあります。

操山山系には城址と言われるものが3箇所あり、西の「明善寺」東の「征木」、そしてこの「円山」です。『円山城の石高は二千石余』との伝承もあります。



↑ 戦国の世が終わり、円山城主寺尾作左衛門の末裔は一時期浅越の地に隠棲し、金岡新田ができた寛文年間に岡山市金田（川北）に移って現在に至っています。

寺尾一統は祖先の霊を弔い慰めるため、毎年の盆と正月前には十数世帯がこぞって、両彼岸には当番が円山のお墓へお参りしています。

耕 運 機 2 題

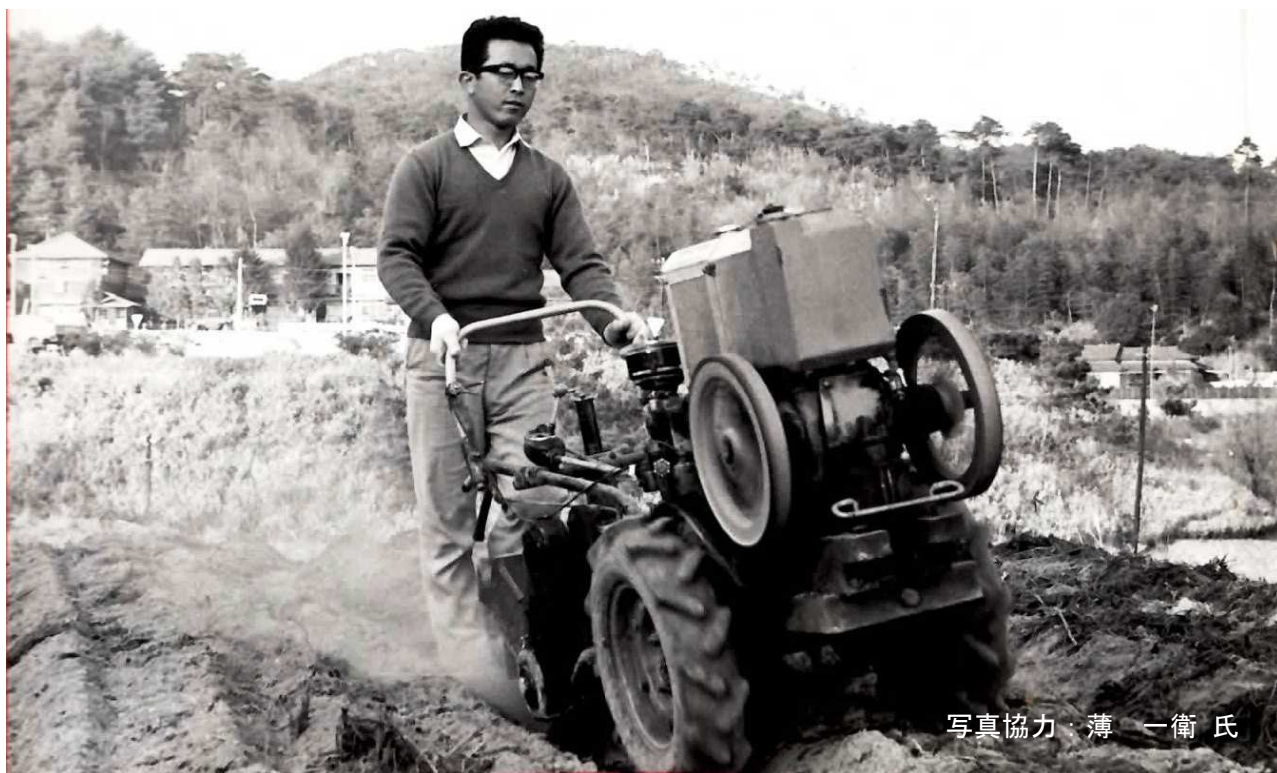
昭和30年ごろ



写真協力：石井治夫氏

↑ 遠景は、海吉出村～福吉方面

昭和35年ごろ



写真協力：薄一衛氏

↑ 現円山団地頂上付近で撮影。後方は円山自動車学校

岡山県自動車学校

(昭和13年ごろ)



練習コースの造成土木工事の様子

写真協力 吉田洋子様 ↑

↓



関係者を乗せ開校記念パレードに出発する車両

昭和十三年七月二十日、岡山県自動車学校として開校し、幾多の変遷を経て現在の岡山（円山）自動車学校に至っている。

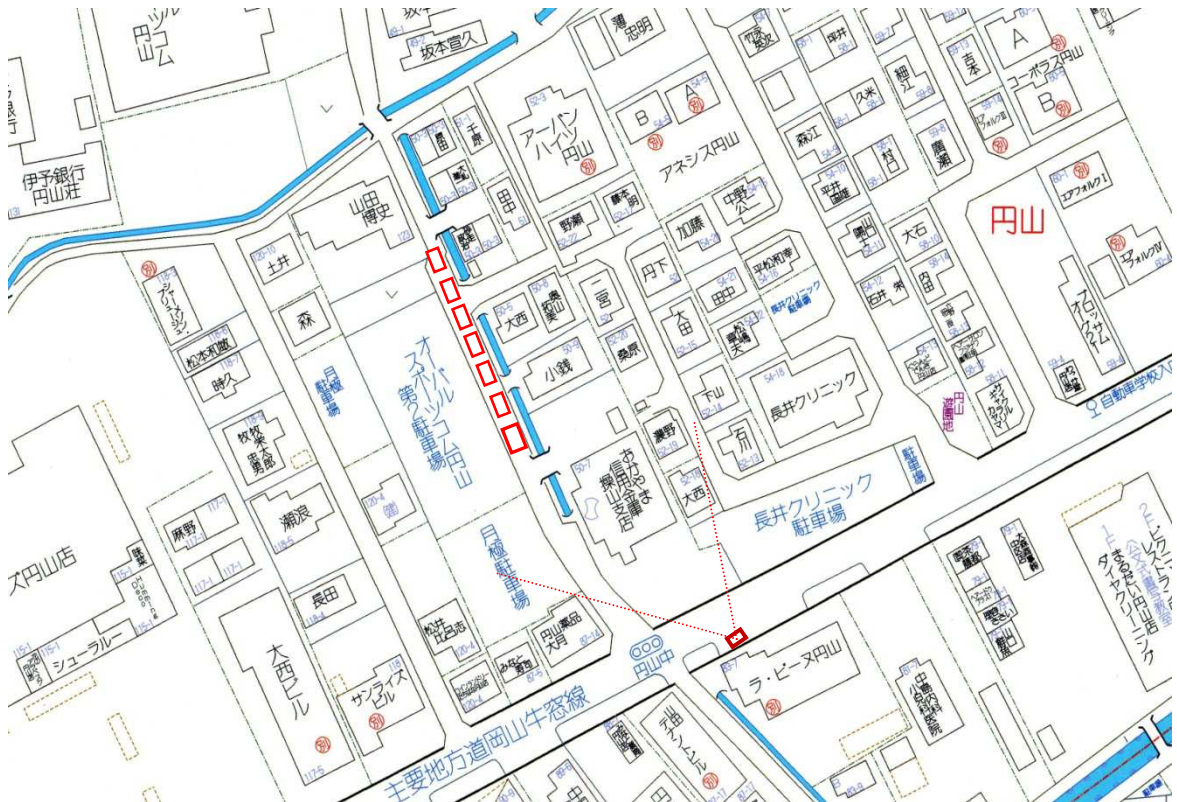
現“おかしん” 操山支店付近

昭和40年ごろ



↑昭和40年、現在の中区円山地内の道路を南進し、やがて円山薬品のある県道十字路にさしかかる葬列。右手田んぼの手前には、現在は「おかやま信用金庫操山支店」が建っていて、用水はほとんど蓋掛けされている。

写真提供：円山 薄 一衛 氏（葬列も薄家のもの）



ノスタルジア「嶽」

昭和30年ごろ



← 昭和30年ごろの嶽交差点付近の8枚の接合写真。

左下の旧公会堂前には、2本丸太の火の見櫓がある。(下の写真も同じ)

(↑ 写真協力：上月義朗 氏 ↓)

昭和30年ごろの嶽交差点付近俯瞰写真。(→)

現在の円山南町内会、円山外新田町内会辺り、さらに山崎ハイライフ辺りは一面の田園地帯だ。



昭和26年ごろ

← 昭和25、6年ごろ、旧嶽公会堂屋根の払い葺きをした時の写真。いわゆる「村普請」らしく、大勢の村民の姿が見える。

ここでも、2本丸太の火の見櫓が写っている。

嶽公会堂は、平成20年に建替え落成した。

写真協力：苔口 登 氏

石油発動機と揚水機 2 題

昭和 8 年ごろ



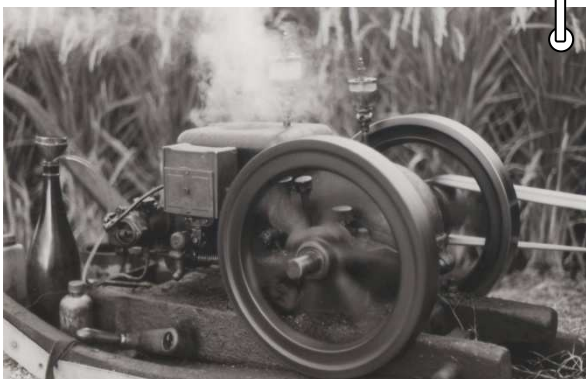
写真は平成になってから撮ったものだが、発動機は昭和七・八年ごろ製。立派に稼働している。

(写真提供 動力Ⅱ 苔口修氏)

↑ 用水から水田に水を入れる揚水機（バーチカルポンプ）とこれを回す石油発動機



発動機は、水冷式・はずみ車式の単気筒エンジンだ。



← 水稲栽培には水が命であり、発動機などの機械化以前は足踏み式水車（みずぐるま）が活躍した。

昭和40年ごろ
写真提供：佐藤泰彦氏

↑ 水車（みずぐるま）を踏む農夫

昭和33年の富山平野鳥瞰 ちょうかん

昭和33年、曹源寺三重塔より ↓



写真協力：原 明敏 氏

昭和33年、嶽の山より ↓



写真協力：苔口 修 氏

昭和33年、嶽の山（現在の南望台）より芥子山方向を望む ↓



写真協力：苔口 修 氏

苔口氏が自宅の裏山から芥子山方向を撮ったもの。画中进行斜めに走る県道の南北（円山付近）には一軒の家もない。

富山村国防婦人会

昭和16年ごろ



↑ 写真協力：石井 博 氏

国防婦人会の防空演習



写真協力：佐藤孝章 氏 ↓

「防空演習」とは威勢がよいが、敵機の空襲による建物火災の消火訓練である。

訓練は在郷軍人の指導下に行われ、婦人たちはお揃いのモンペ・防空頭巾スタイルで勇猛果敢に屋根に上り、梯子伝いにバケツリレーで火災現場に想定された屋根に水を浴びせた。

また、救護所の開設、負傷者の担架搬送訓練も行われた。

← 写真協力：吉岡 徹 氏



写真協力：吉岡 徹 氏 ↓

郷土将兵慰問写真帳
富山村銃後奉公会

その1

昭和16年

郷土将兵慰問写真帳

岡山縣上郡

富山村銃後奉公会

資料協力：西島幸一 氏

出征（兵隊に行くこと）し、戦地にある郷土出身の将兵たちに、「皆様のご家族や村民たちはこんなに元気である。心配なくお国のために尽くしてほしい」との村長メッセージにはじまる19ページからなる慰問写真帳である。ここでは家族の写真を除き、他のすべてを紹介する。



富山村出身ノ勇士諸君へ
大陸第一線ニ御奮闘中ノ勇士並ニ内地
各部隊ニ武技ヲ練ル勇士諸君
諸君ハ始終オ元氣デ軍務ニ御精励
段ハ皇國ノ爲メ大慶ニ存ジマス同時
其ノ日夜御勞苦ニ對シテ衷心ヨリ感謝
意ヲ表シマス
今回諸君ノ御勞苦ヲオ慰メル爲メ此
写真帳ヲ作リマシタカラオ送り致シマス
御家族ノ分ハ三月二十九日ニ撮リマシタ
諸君ノ御家族ハコンナニオ元氣デス
カラ御安心ナサイ
三月三十日ハ本村デ全村學校ヲ開設
シマシタ各種團休員其他一般村民三
百餘名ガ出席シテ早朝カラ夕方マデ學科
協議ニ訓練ニ眞摯ニ學徒トシテ一日ヲ過
シマシタ寫真ハ其ノ記念ニ撮ワタス皆ニ
元氣デヤツテ居ルデシ女子青年ノ執銃教
練ヲヨク見テ下サイ氣合ガ掛ワタルセウ銃後
皆ニ此ノ意氣デヤツテ居マスカラ食糧開
題ナド決シテ御心配下サイマスナ
内地ハ百花撩乱貽蕩春デスガ諸君住地
ハ各方面デスカラ季候モ色々セウ何卒
御身ヲ大切ニシテ下サイ私達ハ諸君ノ
武運長久ヲ切ニ々々祈リマス
昭和十六年四月 富山村長薄 勇喜太

郷土将兵慰問写真帳

富山村銃後奉公会

その2

昭和16年



小学校校長室の御真影奉安庫

御真影とは天皇・皇后両陛下の写真。この奉安庫に教育勅語も安置されたが、儀式等^{かど}廉ある（特別に取り上げる行事等）場合は、事前に講堂の奉安殿に収められていた。

上道郡富山村役場は、旧富山小学校前（頌徳碑や忠魂碑があるすぐ東手）にあった。



役場吏員

郷土将兵慰問写真帳
富山村銃後奉公会

その3

昭和16年



村内の有力者



役場吏員・村議会議員

郷土将兵慰問写真帳

その4

富山村銃後奉公会

昭和16年



在郷軍人



警防団

郷土将兵慰問写真帳
富山村銃後奉公会

その5

昭和16年



郷土将兵慰問写真帳

その6

富山村銃後奉公会

昭和16年



富山村翼賛壮年団結成記念

昭和17年 2月



写真協力：梶野政治 氏

写真説明： 前列向かって左から黒瀬巡査、内田末寿在郷軍人会長、小野田正孝郵便局長＝初代翼賛壮年団長、大山豊男村長、小野田千代次郡議會議員など

翼賛壮年團

青壮年による大政翼賛会の外郭団体で、正式名称は大日本翼賛壮年団という。

大政翼賛運動の実践組織として、昭和十七年一月十六日に結成された。

全国団の下に道府県団と郡市区町村団が組織され、郷に在^あって兵役にない二十一歳以上の青壮年有志による同志組織で、戦勝を期し、軍務を支援する国策の一つとして瞬く間に全国津々浦々に結成を見ることとなった。

富山村では昭和十七年二月八日に結団式が挙行され、初代（終戦により初代限りで解散）団長に富山郵便局長の小野田正孝氏⁽³⁷⁾が就任した。

敗戦に伴い、小野田氏は名誉職とはいえ「戦争遂行の軍政に加担した」廉^{かど}により、昭和二十三年二月連合国軍最高司令官総司令部により「公職追放」となり郵便局長を免ぜられたが、昭和二十六年六月これを解除された。

戦後の娯楽 “村芝居”

昭和22～23年



写真協力：石井治夫氏

～ 村芝居回顧 ～

戦争が終わり、空襲警報も敵機来襲もなくなった昭和20年代初頭のころ、村人たちの安息を慰める娯楽はといえばラジオと、たまに小学校の校庭で上映される映画ぐらいのものだった。

村芝居が盛んになったのはそのころで、福泊住人に植田昌男（床屋）という（今で言うところの）名ディレクターがいて、彼が脚本から演出、演技指導までを一人でこなしていたようだ。

筆者も小学4～5年生のころ「呼ぶ子鳥（よぶこどり）」と題する母子ものの主役を仰せつかり、遠い空に向かって育ての親を偲んで「おかあさ～ん」と叫ぶ場面ではみずからも涙が出て、満場の感涙を誘ったものだ。

（バター）

芝居小屋の設営は、村内から檜丸太や橋板（長く分厚い木製の板）を借り集め、これらを荒縄（藁＝ワラで縛った縄）で組み立てて農閑期の農家の庭先に舞台を作り、三方を幕で囲って屋根も取り付ければ花道も設えるという文字通りの手作りで、これに裸電球を数個ぶら下げると立派なステージができあがった。

観客席はムシロ敷きで、ご持参の座布団に陣取った観客は、近郷の住民も含めいつも超満員の盛況だったが、やがて昭和24年ころには村芝居の灯は消えたようである。

村役さんが、幕間で「花の御礼を申し上げます」と言っていたから、おそらく入場無料だったのだろう。

遠い、昔の思い出である。

（文：小野田 利正）

村芝居の名優たち ①

海吉出村の青・壮年

昭和22年ごろ



写真協力 : 石井治夫 氏

村芝居の名優たち ②

円 山

昭和22年ごろ



写真協力：薄 一衛 氏

仮装行列の名優たち

本・中 村

昭和26年ごろ



写真協力：太田 操 氏

「暮らしの様子」と「昔の農具」のページについて

ご協力いただいた画像や見せていただいて撮影した写真だけで、往時の生活や営農の様子を、しかも限られた紙面に再現することはとてもできませんでした。

今は使わなくなった生活用品や農具は、あったとしても土蔵や納屋の奥深くに仕舞い込まれていて、その物だけを鮮明に撮影することもできず、あまつさえ所蔵者のご理解とご協力が前提の事業ということもあって、十分に編者の満足するページ成果とはなり得ず、手元にある資料のつぎはぎによる脈絡のない寄せ集めのなできあがりになったことを残念に思っています。

そんな中であって、身近の書物等からの許諾を得ての引用～転写、出張撮影した現物の写真、ご提供いただいた写真などを最大限活用し、編者の拙い知見を動員して若干の解説を付すなどできるかぎりの努力を試みたつもりですが、ご覧になる方々が些かでも往時の富山^{とみやま}の生活の営みを垣間見ていただければ幸甚に思います。

なお、標題の各ページをご覧になって「いつの時代の様子や農具なの？」と思われるでしょうが、そこに紹介した“時代”は「現代に生きるわれわれが、撮られた写真(画像)として紹介し得る範囲での“昔”」であって、明治時代以前の様子はそもそも写真がなく、残念ながら紹介できていません。

ご協力いただいた多くの学区内外の方々や参考にさせていただいた文献の関係者に厚く御礼申し上げます。

以下は、「暮らしの様子」と「昔の農具」のページについてのご協力者等です。

写真掲載ページの煩雑を回避するため、下記をもってクレジット表示に代えさせていただきます。
(特に要望のあった場合は、クレジットを写真周辺に付記してあります)

～ 写真撮影・提供協力者 ～ (五十音順、敬称略)

阿部十嗣男 石井公平 石田芳行 大谷寿一 岡 久太
小野田勝行 小野田利正 笠井浩一 佐藤孝章 平尾順子
古家訓史 三宅一憲 山田卓司 吉岡 徹 吉田節雄
岡山空襲展示室 岡山県立青少年農林文化センター三徳園
岡山シティミュージアム

～ 参考とした文献と写真 ～

「今聞いとかにゃあおえんがな」(ふるさとを語りつぐ会)

「昔のくらしと道具～2『農家の暮らしと道具』」(株)小峰書店及び千葉県立“房総のむら”)

暮らしの様子 ～ 1

昭和30年代以前



写真協力：三宅一憲 氏

昭和10年代初めごろの岡村又吉夫妻とその子息たち
(記念撮影でも、やっぱり火鉢は「主役」)

火鉢考

昨今は各家庭にもエアコンが普及し、暖をとるのは電気や灯油ストーブが主流の便利な世の中になった。

私たちの祖先たちは、夏は扇風機（があれ
ばいいほうで）や団扇（うちわ）で涼をとり、冬は囲炉
裏や火鉢、炬燵（こたつ）や懐炉（かいろう）で暖をとるしかなか
った。

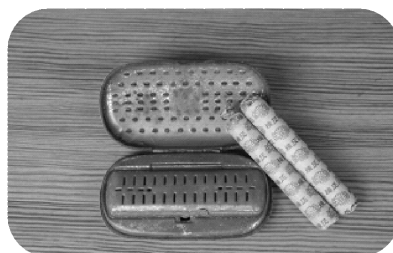
村の集会場にはた
くさんの火鉢が備え
てあって、集会のあ
る晩にはこれに炭火
を熾（おこ）すのが村役さん
の役目だった。

分限者（ぶんげんしゃ）

といわれる家には真鍮製のいわゆる「鉄火鉢」
が多数あったが、戦時中の「大鑑巨砲」鋳造
のためにみんな供出してしまい、終戦間近の
ころの冬場の家族団欒の中心的存在は陶器の
火鉢であった。

古い都々逸（みやこづえ）に「可愛がられて撫（な）でさすられ
て見捨てられたよ夏火鉢」というのがある。

桐灰の懐炉（かいろう）

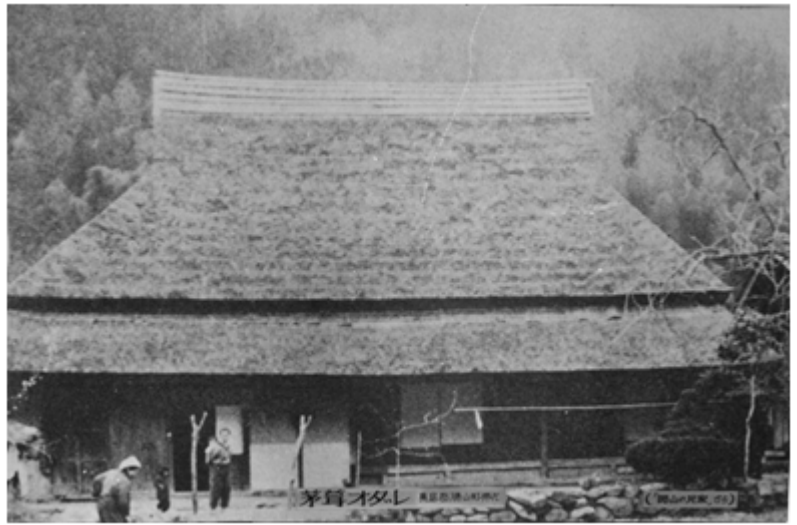


写真協力：平尾順子 様

暮らしの様子～2



↑ 冬・・・居間には採暖の主役である火鉢があり、湯を沸かしていたり、餅を焼いたりもしたが、冬場の家族団欒や来客接遇には欠かせないグッズだった。



↑ 昭和初期以前の民家は、ほとんどが茅（カヤ）か藁（ワラ）葺き屋根だった。

夏は涼しいなど日本の風土に合った建材だったが、葺き替え職人が段々いなくなり、また、屋根地保護等の目的から近年はこれにトタンを被せ、或いは他の建材に代わって行った。

建具にサッシなどではなく、障子や板戸が主役だった。



→ たどん



→ 豆炭



↑ 夜、寝るときの足元に置いたこたつ。熱源は火を着けたたどんや豆炭（木炭の粉を糊で固めたもの）が主流だった。

→ 練炭 炭の粉に糊を混ぜて押し固めた燃料。

空気調節機能の付いた「練炭火鉢」で使い、火持ちのよいのが特徴



↑ 論語机 椅子に腰かける生活習慣が普及したのは戦後のことで、それまで子どもたちは家ではこんな机で「読み・書き・そろばん」に勤しんでいた。

↓ 電気アイロンのない時代には「火のし」（金属製の容器に炭火を入れたもの）で着物などの皺を伸ばした。



→ 七輪 松葉などを燃やし、木炭や練炭を熾して焼き物や煮炊きに使った多目的コンロで、下の気孔を開け閉めして火力を調整する。

「値が七厘ほどの炭で間に合う」のが語源



→ 綿の実の繊維を紡いで燃糸を巻き取る道具。

糸を機織り機で綿布にし、野良着などを作った。



暮らしの様子～3



↑ 上水道のない時代には、炊事・洗濯・風呂に使う水は、井戸や川に頼るしかなかった。



↑ ガスも電気もない時代には「くど」が煮炊きの主役で、主な燃料は薪（まき）だった。



↑ 洗濯はたらいで行い、洗濯板も重宝された。



↑ 餅つきでは洗ったもち米をせいろで蒸して臼に移し、杵（きね）でこねて搗（つ）いた。



↑ 分厚く重い木の蓋が、さながら圧力釜の作用をしておいしいご飯ができる。



↑ どの家の所帯場にもあった飲用水の水ガメ。

飲用水は、山瀬水の湧く井戸などから汲んで来て溜めておく。この家では、石臼を足場にしているようだ。



↑ 石油ランプ。大正時代になって電気が来るまでは、夜は菜種油などに火を灯して夜なべや勉強をした。



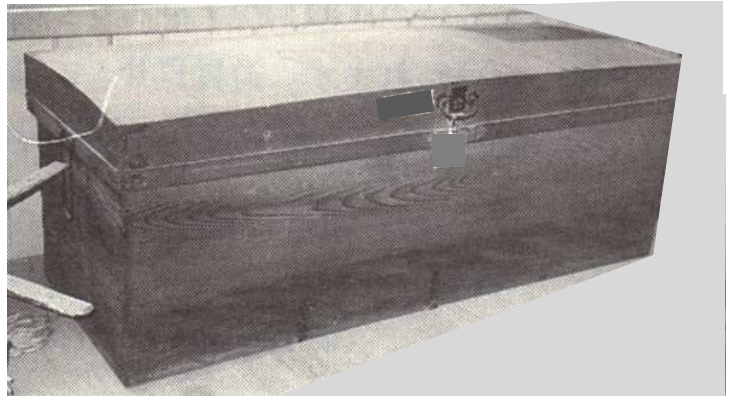
↑ 石臼。米粉、小麦粉、きな粉などを作った。
↓ 焙烙（ほうろく＝土で作った鍋）は、豆を煎るのに使った。



暮らしの様子～4



← ぜんまい、振り子式の柱時計。悠久の時を刻んできたが、現今ではクォーツ・電波時計が取って代ってしまった。

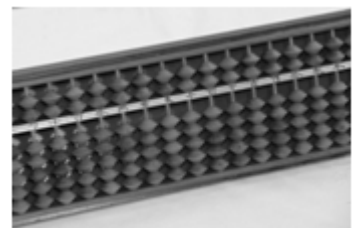
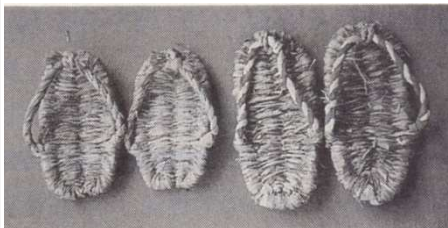
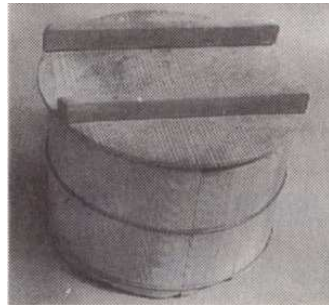


↑ 長持（ながもち）。夜具（布団）の収納容器として江戸時代に出現し、庶民も嫁入り道具の一つとして輿入れ道具に加わるようになった。
旧家の倉には、かならずあるはずだ。



↓ 炊けたご飯を入れるお櫃（ひつ）。そのご飯を保温する（藁で作った）通称「ねこ」↓

↑ 支那カバン、今でいうところのスーツケースだ。上京する学生や出張する勤め人がインバネスやトンビ（男性用の防寒上着）姿でこれを持つと、なんだかよく似合った。



↑ こんな道具や足指を使い、稲藁（ワラ）で編んだ「わらぞうり」↑

昔の5つ玉のそろばん↑



↑ コウモリ傘が出現するまでの主役は、竹と油紙の番傘だった。



↑ 箱枕。鬘（まげ）などの髪型を保護しながら寝るために用いられた日本髪用の枕。必要性あればこそだが、われわれが使うと首の筋を痛めるのがオチで、安眠は無理（？）



↑ 雨の日の野良仕事には蓑（みの）と笠が用いられた。

暮らしの様子～5



※

↑ 蚊帳（かや）。
網戸で蚊の侵入
を防ぎ、エアコン

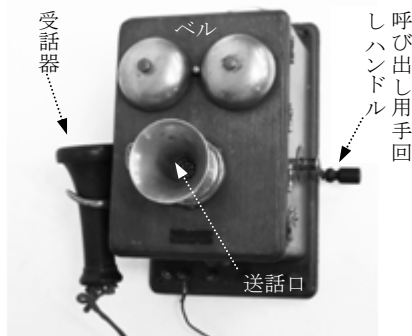
ンで外界を遮断した現代では使われなくなってしまったが、寝苦しい夏の夜に蚊帳のなかで団扇（うちわ）を使って夢路を辿ったものだ。



↑ 蓄音機（ちくおんき）
右手のクランクハンドルを回してぜんまいを巻き、ターンテーブルにレコード盤を乗せて鉄製の針が拾う振動を増幅して聴く。電気を使わない全手動の代物だ。



↑ 石油ランプ
各家庭に電気が来たのは大正時代。それまでは石油ランプが夜の灯りの主役だった。火を覆う「ほや」の煤（すす）掃除は大きい子の仕事だった。



↑「電話機」 まず初めについたのは、役場、郵便局、駐在所ぐらいだっただろうか。



↑「蠅帳」（「蠅入らず」ともいう）
食卓版の蚊帳。帰宅の遅い亭主の夕飯などに蠅がたからないように被せた。トイレの水洗化が進んで蠅がいなくなったが、蚊取り線香と蠅叩きは夏の必需品だった。→



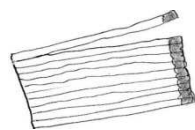
※印3点の写真は、(株)小峰書店の「昔のくらしと道具～2 農家のくらしと道具」より千葉県立「房総のさと」の許諾を得て転載させていただきました。



↑ 練炭火鉢。練炭は使いようでは1日中燃え続けるので、火力を調整しながら煮豆などをコトコト煮るのに重宝された。
おやつ代わりに餅を焼いたりスルメ（のしイカ）を炙ったりもした便利グッズだが、使い方を誤ると室内に一酸化炭素が充満し、中毒死した事故もよく耳にした。



←「手動バリカン」 初めは電動などではなく、床屋もこれを使っていた。家庭にもあったが、へたくそおやじにやってもらいと髪の毛がバリカンの刃に挟まり、「あ痛たッ！」という思い出を持つ昭和初年代のわんぱく坊主もおいでになるだろう。



↑ つけ木。マッチにも不自由な時代には「つけ木」（先端に硫黄が付いた極薄の木片）を使って火種から火を移していた。

「火消し壺」 →
「くど」でできる薪の燎（おき。真っ赤な燃えカス）や用済みの七輪などの炭火をこの中に入れ、酸欠で消火する。次に火を熾（おこ）すとき着火しやすい消し炭ができる。



暮らしの様子～6

戦時中の富山村の様子

昭和16～20年当時



M47型焼夷

昭和20年6月29日未明、岡山市街地はアメリカ軍のB-29（爆撃機）138機による空襲を受けた。焼夷弾が雨あられのように投下され、死者1737人、被害家屋約1万2千700戸の被害があった。幸いにも富山村は空襲には遭わなかったが、操山の山中や円山の田んぼなどでは、流れ弾と思われる焼夷弾が見つかっていて、円山の山田清史氏宅には実際に焼夷弾が落ちてきたという。

← これは、円山の田んぼに落ちた何発かの焼夷弾のうちの一つを回収したもの。



中部軍情報が発する防空警報には警戒警報と空襲警報があり、警鐘の鳴らし方は、
☆ 空襲警報 —
☆ 警戒警報 —
だった。

この2枚の写真は、岡山空襲展示室の提供




← 灯火管制用の電球

← 灯火管制用遮光フード。夜間空襲警報などが発せられると、住民は灯りが外

へ漏れないようにして息をひそめた。笠部に「漏らすな一光 敵機を招く」とある。

↑ 防空頭巾（ぼうこうずきん）は、爆撃による飛散物や火の粉から頭部を保護する目的で推奨され、子どもたちも被ったり携行したりして学校へ通った。



「中部軍情報！敵機は・・・」とラジオから防空警報放送が流れると、小学校のサイレンが響き渡り、村の警鐘台の鐘（)が打ち鳴らされ、学童は裏山へ避難し、村人は野良仕事をやめて物陰から不安そうに上空を見上げたものだ。

気のきいた家は、庭先に自家製の防空壕を設えており、防火水槽は軒並みに設置していた。



↑ 富山国民学校（小学校）の屋根の上に設置されたサイレン

← 小学校校庭は、国防婦人会の訓練場でもあった。



担架による負傷者搬送訓練中の富山村国防婦人会

↑ 巡閲する在郷軍人の向こうには、鉄骨造りの立派な福泊の警鐘櫓が見える。村内の警鐘台はことごとく「供出」となり、木柱へと代わって行った。（詳細は富山学区のホームページを参照）

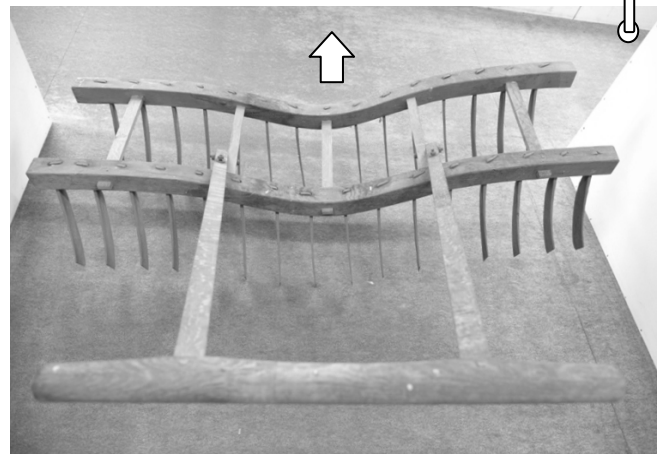
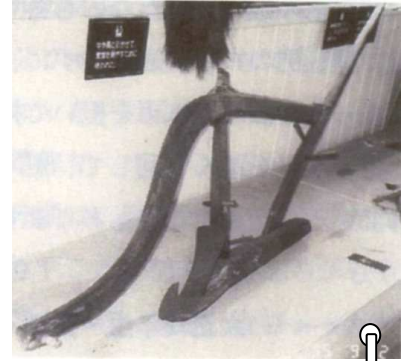
昔の農具 ①

～ 作付け ～



← 飼い葉切り（押し切り）は、飼い葉（牛馬の餌）や堆肥用に藁（わら）などを切る道具

牛に引かせる田起こしの農具。（牛の鍬が訛って「牛んが」と呼ばれた。 →



↑ 田起こしされた田に水が入ると、こんな形のを牛や馬に引かせ、田んぼぢゅうをバシャバシャと縦横に「代攪き（しろかき）」して田植えの準備を整える。

↑ 掘り起こされた土くれを小さくこなす（砕く）農具もあり、こちらは馬の鍬、転じて「馬んが」（まんが）と呼ばれた。牛馬に↗方向に引かせ、人は取っ手を押さえて力加減をした。



← 田植え風景。
田には、自然に水が入る「のり田」と、人為的に水を入れる「かき田」がある。
→ 「かき田」では足踏み式の水ぐるまや動力式のバーチカルポンプ（続称：ヒューガラ）が活躍した。



↑ 岡山シティミュージアム提供



← 田植え綱
田草取り機 → 手押し回転式で田の表土をひっくり返し、あるいは表土上の小さな草を押し削る農具（おかめ）



昔の農具 ②

～ 脱 穀 ～

麦や豆類の脱穀には唐竿^{からさお}も使われたが、稲の脱穀は「千歯^{せんばこ}扱き」（又は、単に「千歯^{せんば}」）といわれる全手動式脱穀だった。鉄でできた櫛の目の部分に一掴みずつ稲わらの稲穂を当て、手前に引いて実（粃＝モミ）を削ぎ落す。気が遠くなるような根気と、たいへん力のいる作業だった。 ↓



唐 竿



やがて足踏み～回転ドラム式の脱穀機が出現し、脱穀作業はずいぶん早く楽になった。ほどなく、このドラムをベルトを介して発動機で回転させる大型の脱穀機へと進展したが、現在の自走式コンバインにも同じ原理のこのドラムが内蔵されている。（↓）



足踏み駆動板

昔の農具 ③

～ 収 穫 ～

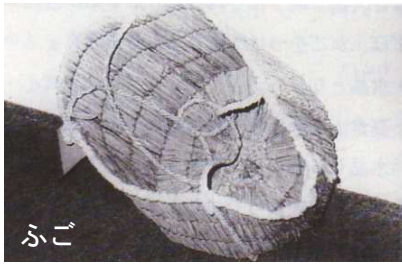


こも編み機



足踏み式縄織機

昔は、こも、むしろ、かます、ふご、俵、藁縄など、農家自作の藁で作った用具が多かった。



ふご



藁（わら）打ち ↑
俗称：てんころ



かます



唐箕

← 脱穀した穀物は唐箕で実と芥（藁屑など）を選別する。

温風乾燥機が出現するまでは
粃をむしろの上で天日干して、
1日に1回はこの道具でかき混
ぜて乾燥を促す。→

乾いた粃を粃すり機にかけて、
やっと玄米になる。



↑ 粃探り（もみさぐり）棒



唐臼（からうす）

「唐臼」足踏み式の精米機。奥側の力
点を踏むと、重りが付いた作用点の木
槌が石龜の中の玄米をついて精米する。



← 万石（玄
米を選別す
る道具＝米
選機）

斗 約 4 杯
で 1 俵の米
俵（16 貫
≒ 60 Kg）
の米俵にな
る。

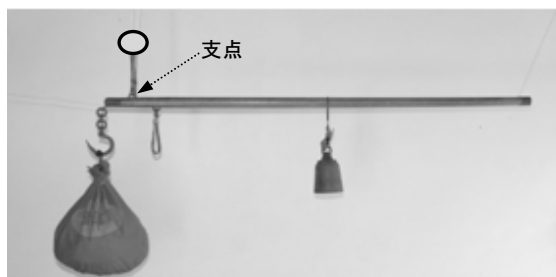
斗 俵（とます）



→ 背負子
村人たちは農閑期には山へ入って焚
き木を集め、持ち帰って燃料にした。



てんびん秤 →
竿の長さが1.4mの
大型の秤。支点に棒を
通して2人で担ぎ、フ
ックに米俵を吊るし
て16貫を測った。



オール藁（ワラ）製の米俵



災 害 の 記 録

昭和47年7月



昭和47年7月の洪水。自転車で通行中の男性が水勢に流されるのを、住民が助けている。
(国土交通省「百間川小史」より)

平成18年6月

山崎本町の道路冠水



写真協力：富山学区防災協議会



備前國海面村水利道路繪圖(部分)



現在の県道28号=岡山~牛窓線

百間川堤防

逆さU字形の大きな沼地があり、村人たちは「ふち」と呼んでいた。昭和30年代後半に至り岡山市のごみの埋め立て地となり、「ふち」は姿を消した。

ふち

昭和40年代に入り立石電機(株)が進出し、後にオムロン(株)と社名変更、現在は同社岡山事業所/オムロンスイッチアンドデバイス(株)が概ね――内――に立地している。

お わ り に

多くの学区民のご理解とご協力のお陰をもちまして、ここに曲がりなりにも写真画像として収集し得た範囲内の「昔とみやま写真館」を刊行する運びとなり、ここに幾多の情報・資料を提供して下さった皆様方に対し、心から感謝と御礼の誠を捧げます。

本当にありがとうございました。

およそ庶民が写真機なるものを手にしたり、写真に納まったりし始めてからおおよそ100年の間、わが郷土“富山”の風景やできごと、さらに暮らしの様子を写真館（冊子）にまとめるという事業はわれわれにとっても初めての体験であり、換言すればわれわれは「100年に一度の事業」をやり遂げたことを限りなく誇りに思うと共に、関係者の皆様と共に達成感を分かち合いたいと思います。

とは言いながら、情報・資料の提供をお願いしてからわずか4カ月程度の短時間での速成刊行であり、まだまだ紹介・収容し漏らした捨て難い写真が眠っているのではないかと考えられ、どうか、この「昔とみやま写真館」をご覧になった方々におかれては、さらなる本写真館充実のために、引き続き情報・資料の提供にご協力くださるよう伏してお願い申し上げます。

また、われわれの次の世代を担う学区民の皆様におかれては、われわれの遺した拙い業績を更に充実・発展させるべく、「成果の継承」にご注力あらんことを切に期待し、感謝とお願いのご挨拶とさせていただきます。

平成28年 1月 1日

岡山市富山学区連合電子町内会運営委員

委員長 小野田 利 正

委 員	井 上 秋 子	太 田 操	佐 藤 孝 章	薄 一 衛
(五十音順)	長 畑 政 人	中 村 晃	新 田 知 明	平 井 資 朗
	広 瀬 正 芳	矢 尾 千 入	安 井 芳 江	山 田 卓 司
	行 枝 学	横 地 麻 一	吉 田 節 雄	和久野 勝彦

平成 27 年 10 月 15 日 初版作成
平成 28 年 1 月 1 日 PDF 版作成
令和 元年 10 月 1 日 第 2 版作成 (PDF 版のみ)